

学際的ワークショップ

『精神分析の知のリンクにむけて』

— 第四回「精神分析と人文学」 —

1907年9月22日に、ローマの文化の魅力に酔いしれたフロイトは、「コロナ広場には毎晩数えきれない人々が集まってきます。夜の空気がおいしく、この広場には繰り返し新しい出し物があり、…私は夜の九時までこの魔法にかかったままです…」と、家族に手紙を書いています。美術史家ジョナサン・クレーリーは、この夜に、フロイトは都市が強い「選択や規律としての注意」に対抗し、あえて注意を分散させ、情動に身を委ねる態度が生む独自の力に気がついたのではないかと示唆しています。フロイトが「平等に漂う注意」という基本的な分析技法を提示したのは、その5年後の1912年です。また『ヒステリー研究』に始まった自由連想法という手法は、1900年代には精神分析の基本原則として確立されていました。精神分析家は、患者が自由に浮かぶ連想を、分析家が分散した注意とそれに基づいた低い集中で聞くことによって、独自の創造的な力を手に入れたのです。フロイト以降の精神分析は、フロイトが発見した独自の力を持った方法を、多様な患者に適用することによって、様々な精神分析理論を練り上げてきたと言えるでしょう。

第四回のワークショップでは、精神分析という方法を生み出した文化・芸術的背景と、精神分析が人文諸科学に及ぼした影響を考えることにします。主題となるのは、知覚、注意、記憶、情動などといった近代の人間を構成する諸要素です。これらの諸要素を巡って、精神分析と人文学がどのような脈脈を切り開いてきたかという問題を討議したいと思います。

今回は、多くの臨床家にもインパクトを与えた『フロイトのイタリア』の著者であり、現代イタリア思想、美術史の第一人者である岡田温司氏と、『判断と崇高』の著者であり、フランス現代思想に精通した気鋭の哲学者の宮崎裕助氏を発表者としてお招きします。司会は小寺財団理事長の藤山直樹、指定討論は当ワークショップのコーディネータの十川幸司が担当します。

日時：9月22日（日）13：00～17：00

場所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター（JR 総武線市ヶ谷駅 徒歩2分）

参加対象：精神分析に関心をもつ方はどなたでも参加できます。

発表者：岡田温司（京都大学大学院）

：宮崎裕助（新潟大学）

司 会：藤山直樹（個人開業）

討 論：十川幸司（十川精神分析オフィス）

参加費：5000円（学生は3000円）

定 員：100名

申し込み方法：2019年9月14日（金）までに小寺記念精神分析研究財団事務局に e-mail でお申し込み下さい（kodera.kt@nifty.com）。

表題は「学際的ワークショップ申し込み」とし、メール本文に、氏名、住所、ご所属とご身分（学生、教員、会社員など）お書き下さい。返信メールにて、お振込みのご案内をさせていただきます。

主催 小寺記念精神分析研究財団